

堅田踊りと浄瑠璃

歌詩についての考察

後 藤 知 久

(会員・佐伯市中山区)

現在、私は上堅田の地区公民館で、高齢者のための民謡教室の指導をしている。

毎年盆が近付くと、必ず練習する踊りが二つある。

一つはお為半蔵の心中事件を歌い込んだ長音頭、いま一つは与勘兵衛である。長音頭は別にして、与勘兵衛の方は、県の民謡連盟が開く指導者講習会で教わったが、どうも地元の人が踊るのを見てみると、扇の使い方が鮮やかで、一緒に踊るのは気遅れがして、私自身はあまり踊らないことにしている。

ところで、この堅田踊りだが、初めて長音頭の歌を聞

いた時、どこかで聞いたことのある文句のような気がしたのである。

何年前か前、私の友人が下堅田の支所長をしていた時、地域の青年団の協力を得て、「堅田民謡集」という本を発行した。それは、主に何十種類もある堅田踊りの歌詩をまとめたものだが、それを見て、やっと納得がいったというのは、ご存じのように堅田踊りは大変種類が多くその一つ一つの歌詩を見ていくと、歌舞伎(いや浄瑠璃)の名作の物語が取入れられているのに気がつく。勿論、時代的にみて、歌舞伎というより人形浄瑠璃が基になっているように思うのだが、私は子供のころから父の影響で歌舞伎に興味を持っていたので、一体、どのような狂言が引用されているのか調べてみることにした。

いま「佐伯市史」をひもといてみよう。それによると堅田踊りが発達したのは、堅田九か村が天領になった寛永年間以後三百年の間となっている。

では、どうしてこのような踊りがこの地に発達したかといえ、それは、天領であったため、時折り代官所から役人の見廻りが来ていたので、そのつれづれを慰める

ために起きたもので、これが、やがて農村娯楽の中に取り入れたのが成因だといっている。

もっとも、ご存じのように、かつては柏江は京阪地方と結ぶ重要な港であったということだから、その踊りは上方風で、ものによってはお座敷踊りのような感じのものもあるし、先に述べた歌詩に、浄瑠璃が多く使われていることも理解できるのである。

というような訳でまとめはみたが、浄瑠璃といっても何分数は多いし、好きだから数多くの舞台を見たといっても、中には最近上演されないものもあるので、きつと十分でないという面もあるが、それはご容赦願いたい。

では、一体どのくらいのものが引用されているかとなると、音頭によって同じ狂言が使われているものもありそれを一つと見なした場合、大体十五種程度のものが使われているようである。

これを年代的に見ると、一番古いものが享保二十年（一七三五）で、最も新しいのは享和元年（一八一〇）で約六十五年間に作られた作品のようである。

ここでちょっと問題になるのは、「堅田踊りが発達したのは寛永年間以後三百年間」とあるので、寛永時代は一六二四年に始まっていることから、こうした浄瑠璃を引用したものは、年代的に見て、この踊りが始まって中期以降のものとなりそうである。してみると、踊りの中で浄瑠璃の引用のないものの方が古いということになるのだろうか。この辺のことは私には分からない。

一方、演劇史の方から見ると、義太夫節による人形浄瑠璃の黄金時代は、享保の末ごろ（一七三〇）から宝暦（一七六〇）にわたる三四十年間となっている。「歌舞伎はあれど無きがごとし」と言われる程、この時代は人形浄瑠璃の人氣は高く、宝暦年度にその頂点に達し、やがて下り坂になっている。その原因は、作者や演出家の死亡ということが挙げられている。私が浄瑠璃からの引用ではないかと思ったのは、この後に続く鶴屋南北や河竹黙阿弥などの作品が全然見当たらないからである。それに、歌舞伎といえば当時の江戸で、大阪の方は人形浄瑠璃が圧倒的な人氣があったので、そことの関連のあった堅田といえ、そうなるような気がするのである。それでは踊りそれぞれから見えていくことにしよう。

◎ お夏清十郎 (北部・津小
泥谷)

向こうとおるは清十郎じゃないか
笠がよく似たすげの笠

これは、宝永六年(一七〇九)一月二日、大阪の竹本座で上演された、近松門左衛門作「五十年忌歌念仏」の物語から取ったもので、現在は、あまり劇として上演されることはないが、舞踊の世界で生きているようである。

◎ 伊勢節(泥谷)

そも熊谷直実は花の盛りの敦盛を
打って無情を悟りしが
打って無情を悟りしがすがにたけき熊谷も
ものあわれを今ぞ知る

これは、宝暦元年(一七五一)十二月十一日、大阪豊竹座で上演された、浅田一鳥、浪岡鯨児・並木正三・難波三蔵・豊竹甚六・並木宗輔合作の「一谷漱軍記」から取ったもので、今日でもよく上演される。わが子を身代わりにする代表的なものである。

◎ 我が恋(波越・府坂・竹角)

初花が夫の勝五郎介抱して
箱根の山を引車、さても貞女な操かな

これは、享和元年(一八〇一)八月四日、上演の司馬芝叟作「箱根靈験いさりの壁仇討」から取ったものだが、近年大劇場で上演されることはあまりない。

◎ 十二梯子(波越)

十二梯子の二階より 上からお軽さんがのんのべ鏡
下じゃ由良之助ふみを読む さゝ縁の下九太夫かな
塩治判官たかさだが 白木の三方にはら切り刀
力弥由良之助まだこぬか さゝ只今参上でな
鶴が岡なるご神殿に 数多のかぶとのあるなかで
これがたかさださんのかぶとじやと

さゝ顔世が目きゝでな

これは、寛延元年(一七四八)八月十四日、大阪竹本座上演の、竹田出雲・三好松洛・並木千柳合作「仮名手本忠臣蔵」から取ったもので、もうご存じのとおりであ

る。

「義経千本桜」「菅原伝授手習鑑」と共に、三大歌舞伎の一つとして、上演されない月はないと言われる程上演されている。

先年、国立劇場で上演されたものをビデオで取ったら十三時間分ぐらいの大変長い芝居である。

ついでに言えば、この物語は、松の廊下で後ろから抱きとめた加古川本蔵と、同じくこの事件の最中にあいびきしていたお軽・勘平の二つの物語と、これにからむ大星由良之助の物語で構成されているものだと思えばよい。

先に挙げた歌は、最初が七段目の「祇園一力茶屋の段」次が「四段目の判官切腹の場」最後が、これは逆に劇の発端に当たる「大序鶴岡八幡兜改め」の場で、ここの演出は面白く、はじめ人形ぶりで登場人物の紹介がある。

このあたり人形淨瑠璃から取入れられた名残りかもしれない反面、この長編を上演するための儀式めいた感じもある。この引用は他の踊りにも見られる。

◎ 淀の川瀬（波越・石打・府坂）

一字千金二千金 三千世界の宝ぞや

数える人になろうこの中にまじわる菅秀才

武部源蔵夫婦のものが（しゆさい）

ここを尋ねてくる人は 加古川本蔵行国が

によろぼう戸無瀬の親子ずれ

みちのあないの乗りものをかたえにひかえた

親子ずれ

これは、前の「仮名手本忠臣蔵」と、延享三年（一七四六）八月二十一日、大阪竹本座で上演された、竹田出雲・並木千柳・三好松洛・竹田小出雲合作の「菅原伝授手習鑑」から引用されている。

この芝居も非常に人気の高い作品で、中でも「寺小屋」の上演されない年はないという程、上演回数が多い。

梅王・松王・桜丸という三兄弟の悲劇と、菅原道実の子菅秀才を守る武部源蔵夫婦の忠節が中心になっている。

最初の歌の文句は「寺小屋」からで、後の方は「忠臣蔵」の八段目、所作事「道行旅路の花嫁」から取ったものである。

本蔵の娘小浪と由良之助の息子力弥は親の許したいはずけ同志で、その二人を一緒にさせようと継母の戸無

瀬が、由良之助の閑居山科への道中である。

ついでに言えば、次の九段目は、山科の閑居に来た戸無瀬が、大石の妻お石に二人のことを話すと、それはできないと冷たくあしらう。思い余った親子は共に死のうとする、それ程までに言うのなら許しよう。しかし、それには条件がある。加古川本蔵の首を結納がわりに持っていこう。

頂度その時、玄関で尺八を吹いていた本蔵は全てを察し、自ら力弥の手にかかって二人を結び合わせる。……私が一番好きな場である。

「寺小屋」の方は、武部源蔵がかくまっていた菅秀才のことで訴人があり、三兄弟の中でただ一人敵方に身を置く松王が首受取りにやってくる。そして、女房の千代が前もって寺入りさせてあったわが子の首を討たせ、身代わりにし、悲しみのうちに野辺送りをする涙の場である。

◎ しんじゅ (西野)

かの源の義賢は、源氏白旗小まんに渡し
すぐにその場で腹切るしんじゅ

大阪腕屋久右衛門 太い身代丸山がよい

今はあみ笠一つのしんじゅ

これも二つの狂言から引用されている。一つは、寛延二年(一七四九)十一月二十八日、竹本座で初演された並木千柳・三好松洛の合作になる「源平布引滝」。その四段目の義賢最後である。現在では片岡孝夫がこの役を得意としている。

いま一つは、あまり上演されることがないのでよく分からないが、舞踊の「二人腕久」に同名の登場人物があるので、その物語だと思っている。

◎ きりん (西野)

清十郎二十一 お夏が七つ

あわぬ毛抜を合わしよどすれば

森の夜がらす泣きあかす

これは、先に挙げたお夏清十郎の物語からである。

◎ おののとおふ (西野・府竹)

早野勘平さんは主人のために
妻のおかるにやつとめさす

おかるにや妻のな妻おかるにやつとめさす

斧の九太夫はどうよくものよ

主の誕夜にたこ肴

誕夜に主のな主の誕夜にたこ肴

ものあわれは石童丸よ

父を尋ねて高山に

尋ねて父をな父を尋ねて高山に

これも前半は「仮名手本忠臣蔵」の六段目
と七段目である。お軽と勘平の物語は最初の
方に落人となる訳と道行があるが、眼目は五
六段目の山崎街道と切腹にあり、七段目が終
結となっている。

斧の九太夫は、実際は経理に明るい人だっ
たらしいが、その子定九郎は山崎街道でお軽
の父を殺し、自分はいのししと間違われて勘
平に殺される。九太夫は七段目で吉良方のス
パイになり、由良之助の密書を盗見して発見

され、殺される。この歌の文句は、祇園一力で由良之助
の本心をためそうとして、亡き殿の命日を承知で生くさ
ものを食わせるところである。

後半は、享保二十年（一七三五）八月十五日、豊竹座
初演の、並木宗助・並木丈助合作「刈萱桑門筑紫磔（か
るかやどうしんちくしのいえずと）」、ご存じ石童丸の
物語である。なお、「いえずと」というのは「みやげ」
のことである。

◎ 花 扇（西野）

熊谷次郎直実は 須磨の浦にて敦盛を

討ちて無情を悟りしが 末は連浄法師となる身じゃ

ぞえ

千鳥も今はこの里に いとし可愛い源太さん

よろいかわりの三百両 つらや無間の鐘つく身じゃ

ぞえ

これも、前半は前に挙げた「一谷漱軍記」からである。
後半は、元文四年（一七三九）四月十一日、竹本座初
演の、文耕堂・三好松洛・浅田可啓・竹田出雲・竹田小

出雲合作「ひらがな盛衰記」からである。

梅ヶ枝のちようずばち たたいてお金が出るなれば
あの物語である。

◎ 竹にすずめ（石打）

お前や加古川本蔵が娘
力弥さんとは二世の縁

これも「仮名手本忠臣蔵」九段目山科閑居の場から取
つてある。

◎ お染久松（石打）

ゆうべの風呂の上り場で この腹帯を母さんに
見つけられてこりゃお染 この腹帯は何事ぞ

これは、前に挙げた「五十年忌歌念仏」からだと思う。
最近よく上演されるのは、みなさんもよくご存じの、あ
の東海林太郎の歌う「野崎まいり」で有名な「新版歌祭
文」の野崎村である。野崎村の娘お光が、久松との祝言
を前にして、久松を訪ねてきたお染との仲を知り、髪を

下ろして尼になる。久松とお染は、それぞれかごと舟に
わかれて帰って行く。この場面は、舞台両花道を使い、
誰もがよく知っている三味線の伴奏に乗って引っ込んで
行く名場面である。

もう一つは、「お染の七役」といって、一人の俳優が
お染・久松はいうに及ばず、主な役を七役早変わりで見
せるもので、これの方が関係がありそうである。

今は、玉三郎が得意にしているが、私は雀右衛門の舞
台を歌舞伎座で見たことがある。

◎ 数へ唄（府坂・竹角）

一つとのよのえ ひしゃくに杖笠おいづるを
巡礼姿で父母を尋にようかいな
十つとのよのえ 徳島城下の十郎兵衛
我が子と知らずに巡礼を殺そうかいな

これはもう十分承知の「傾城阿波の鳴門」からのもの
である。明和五年（一七六八）六月、大阪竹本座初演の
もので、近松半二・竹田出雲・八民平七・竹本三郎兵衛
・吉田兵蔵等の合作である。これとは別に、近松門左衛

門の作になるものもあり、近松の作品を順次復活上演している中村扇雀の主催する近松座が、今年の夏に上演を予定しているようである。

◎ 茶屋のれん（柏江）

園部左衛門清水寺に 刀を納めてその帰るさに

薄雪姫に見とれつゝ 思わずまがきに抱きついて

おゝそそうなことどいのう

可愛い勝五郎車に乗せて 引けよ初花箱根の山に

紅葉のあるのに雪が降る さぞ寒かったでござんし

よう

おゝしんきなことどいのう

これも、最近あまり上演されないもので、前半の歌は

「新薄雪物語」から取ったもの。寛保元年（一七四一）

五月十六日初演。大阪の竹本座。竹田小出雲・文耕堂・

三好松洛・小川半平の合作。

このお芝居は、序幕の清水寺の場は花やかで美しいがどちらかといえば地味なお芝居である。そのくせ名優が揃わねば面白くないという三人笑いなどのむつかしい演技を要求される所もある。聞いたところでは、この芝居

は興行的に受けないものの一つだそうである。私は十年程前、歌右衛門・勘三郎・先代幸四郎で、東京の歌舞伎座で見たことがある。

歌の後半は、前にも一度あった「箱根霊験暨仇討」からである。

◎ 長音頭 お為半蔵心中口説（北部 その他）

今鳴る鐘は江国寺 また鳴る鐘は常楽寺

また鳴る鐘は真正寺 また鳴る鐘は天徳寺

また鳴る鐘は正明寺 正明寺こそ正七つ

五ヶ寺の鐘も皆鳴りて 白む東の横雲に

夜明けがらすが最後をせがむ

もう言うまでもなく、近松門左衛門初の世話物「曾根崎心中」から、これは物語でなく浄瑠璃の文句をうまく取入れている。

元禄十六年（一七〇三）四月七日、竹本座初演。大阪の町で起きた心中事件を取上げた、近松にとっては初めての町民を主役にしたもので、大当たりをしたそうである。今は中村扇雀のお家芸になっている。なんとって

も浄瑠璃の序文と道行の場の名文句がすばらしい。この踊りでは序文の方を参考にしている。

◎ 左衛門（北部）

◎ 与勘兵衛（北部・津小・泥谷・波越・石打・府竹・西野）

眞実保名さんに好きたくば

神の前といつわりて

七日七夜さうらみ葛の葉とねたならば

恋しうござるなら尋ねきてみよ

信田のもりに住むではないかいな

この二つには、享保十九年（一七三四）十月十五日、竹本座で初演された「芦屋道満大内鑑（あしやどうまん おおうちかぐみ）」からとられている。ご存じの狐が人妻となつてのち、ふるさとへ帰って行くという民話の劇化で、作者は竹田出雲である。

◎ むりかいな（波越・西野）

ここは色町くるわの茶屋よ

のれん引き上げお軽さん

由良之助さんわしゃここに

風にふかれてゐるわいな

これも「仮名手本忠臣蔵」の七段目である。

このほか

那須与一（北部）は、「扇的西海祝」（享保十九年）

一七三四）豊竹座初演。並木宗輔・並木丈助）

おしよ亀井の音頭（波越）は、宮城野・しのぶの物語。

「碁太平記白石噺」（安永九年（一七八〇）

白滝（柏江）には、「中将姫古跡松」（元文五年（一

七四〇））の中将姫の物語。

以上、はじめに述べたように、私も全ての狂言を見た訳ではないので、もし、落としているものがあればお許しいただきたい。

参照 名作歌舞伎全集（東京創元新社発行）

堅田民謡集（佐伯市役所下堅田

出張所発行）

佐伯市史（佐伯市発行）